論文の内容の要旨

ロマン・ヤコブソンの言語論における言語記号の「周縁性」

朝妻　恵里子

ロシアの言語学者ロマン・ヤコブソンは、一般言語学はもちろん、スラヴ語研究、詩学、民俗学、情報理論など非常に多岐にわたる研究で知られている。

なかでも、言語を記号現象として捉え、言語に関わるさまざまな事象を普遍的なレベルで理論づけた論考は数多い。ヤコブソンの言語記号論は、形式と意味、そしてその意味の解釈プロセス、さらには言語主体を考慮に入れ、最小から最大までのすべての言語単位を記号現象として包括的に捉えている。ヤコブソンの言語論の多くが、独自の記号論的な観点に基づいており、その言語記号観を踏まえてはじめて、かれの多岐にわたる著作も充分に理解可能なものとなる。

本稿の目的は、ヤコブソンの言語記号論の独自性をコミュニケーションに関する自身の見解から明らかにすることにある。ヤコブソンは 1950 年代半ばごろから、言語の指標性に基づいたコミュニケーション理論を展開し、これによりかれの言語論は言語の使用の場を考慮に入れたより広い視野を獲得することになる。この指標性は、言語記号の類像性とともに、ヤコブソンの記号論においてたびたび扱われる概念である。ヤコブソンの考えていた、言語記号の類像性と指標性の概念を再検討しつつ、コミュニケーション理論にあたることで、ヤコブソンの広範囲に渡る言語論をより包括的に捉えることができる。

具体的な分析対象として、ヤコブソンによる格理論を扱う。ロシア語の格は一般に六格あると

されるが、その六格で多様な意味機能を担っている。必然的に一つの格形式が複数の意味用法を有することになる。また逆に、一つの同じような意味が複数の形式で指示されることがしばしばある。つまり、格には、一つの格形式に複数の意味用法を担わせて、できるだけ少ない数の格ですまそうとする言語の経済性がある一方で、その限られた格の布置によって外部世界を的確に表現しなければならないという補完性があり、この二つの性質が拮抗することで格は体系を保っている。格のこうした性質は、ヤコブソンが考えている記号性質と一致する。ヤコブソンは言語記号をシグナンスとシグナートゥムが一対一に対応するものとはみなさずに、双方が非対称的なものであると考えているのである。

また、ヤコブソンの格論において、ロシア語の格がもつ類像性と指標性の性質が強調されているという事実もあり、格体系はヤコブソンが認めている言語記号の特質を顕著に反映した検証材料であると考え、第 I 部でヤコブソンの記号理論を再検討し、第 II 部で格体系を具体的な考察対象として扱った。

第 1 章では、まずソシュールとヤコブソンの言語記号観を比較し、そのことによってヤコブソンの記号観の独自性を明らかにした。ヤコブソンとソシュールは、言語記号をシグナンスとシグナートゥム（ソシュールの術語ではシニフィアンとシニフィエ）という二つの局面から捉えるという出発点は同じであったものの、双方の結びつきを恣意的とみるソシュールに対して、ヤコブソンはむしろその結びつきの有縁性を主張しているという点で大きく異なっている。ヤコブソンはパースによる記号の三分類を自身の言語記号理論に取り入れ、シグナンスとシグナートゥムの恣意的な結びつきに基づく言語記号の「象徴性」のほかに、双方の類似的な関係に基づく「類像性」、そして近接的な結びつきに基づく「指標性」という概念を獲得した。これらの概念によって、ヤコブソンが記号と「対象」とを直接的に結びつける方法論を得たことをこの章では明らかにした。

第 2 章と第 3 章では、言語記号の「類像性」と「指標性」とをそれぞれ取りあげた。第 2 章では、ヤコブソンが「類像性」のあらわれとして挙げた、音と意味、あるいは文法形式と意味との相関性を実例とともに考察し、形式と意味との結びつきには何らかの必然性があるというヤコブソンの主張を確認した。また、ヤコブソンが考えていた言語記号の「類像性」とは、単に形式と意味とのあいだの実際的な類似性に依拠する現象というだけでなく、人間の認知的な思考プロセスに根づいた普遍的な作用に基づく性質でもあるという点まで論をすすめた。ヤコブソンには一貫して、言語主体である人間が言語をつくりかえてきたという目的論的見解がみられるが、その主張のあらわれの一つとして言語記号の類像性に関する見解があることがわかった。

第 3 章では、記号と対象との近接的な関係に基づく言語記号の「指標性」について論じた。ヤコブソンは、1950 年代半ばに執筆したコミュニケーション論において、発話行為の基準点を参照することによって成り立つ指標的な文法カテゴリー（人称、法、時制などのダイクシス）があるという考えを得、コードとメッセージとが直接的に結びつく言語現象を理論化した。この章では、こうした言語記号の指標的性質の解明を契機に、ヤコブソンが「コンテクスト」という概念をもつに至ったことを明らかにした。指標的性質はダイクシスにのみ見られるものではなく、あらゆる言語活動で作用することをヤコブソンは示唆しており、これが「コンテクスト」という概念に拡大したと考えられるのである。「指標性」、さらには「コンテクスト」の概念の導入によって、コードとメッセージの相互作用の視点、言語と発話事象をも含んだ事象世界とが結びつくというヤコブソン独自の見解が得られた。

ここまでで明らかになったヤコブソンの言語記号観を踏まえて、第 4 章からは具体的な言語事象としてロシア語の格を扱った。ヤコブソンの格理論は、形態論的な観点から、格そのもののもつ「一般的意味」を取り出すことを目的としている。文の環境に依存した「個別的意味」は、統語論的な研究で扱うものとされ、ヤコブソンの形態論的な研究では除外されている。この観点から取り出されたロシア語の格の一般的意味が「方向性」、「範囲性」、「周縁性」の三つである。

三つの意味素性に基づくヤコブソンによる格記述の確認・修正を第 4 章でおこなったが、第 5 章ではより詳細に検証するために、前置詞を伴う格の前置詞句を分析した。ヤコブソンは、前置詞句への言及をしながらも、単独での格のはたらきと、前置詞句内での格のはたらきとを同一視し、前置詞句内という環境に注意を払っていない。しかしこの章の分析で、前置詞と格との間には明らかな共起関係があることがわかり、ヤコブソンの形態論的観点に基づく格理論の限界が露呈した。

また、ヤコブソンの前置詞句の分析においては、意味のメタファーに基づく拡張に関する方法論が確立していないため、辞書的記述の域を出ていないが、本稿の分析で「場所」をあらわす前置詞には、決まったパターンの意味拡張がみられることが実証された。他方、「場所」をあらわさない前置詞、たとえば без や для などはこうした意味拡張はみられない。つまり、前置詞句の多義性は、「場所」をあらわす前置詞の汎用性が主因となっていることが明らかになった。

第 6 章では、ヤコブソンが、「周縁性」の無標格である造格に多くの関心を寄せていることから、その理由を明らかにするため、「周縁性」の意味素性に焦点をあてた。まず、造格の多岐にわたる用例を分析し、造格という記号の性質を考察した。その結果、造格の用法の多くが、中核的な意味の「道具」からのメタファー的意味拡張によって説明でき、柔軟に汎用することのでき

る格であることがわかった。

また、造格は単に修飾語的な役割をはたす「周縁」に位置する格ではなく、意味・情報の観点からは中心的な役割を担うことさえある格である。たとえば、動詞で示された動作の展開を積極的に促す機能を有していたり、何らかの新しい状態や出来事をあらわす機能があったりする。あるいは造格は、主格で指示された文と同意文をつくることが可能な格であるが、造格指示と主格指示からなる二つの文の違いには、話し手の認知的な視点が反映される。つまり、造格で指示すれば、話し手はその対象を「格下げ」して表現していることが示されるのである。こうした造格のもつ、主体の視点の格下げ機能や意味展開の役割は、具体的な発話、コミュニケーションにおいて発揮されることから、コンテクストを参照することでのみ意味がとれるという造格の指標的性質の高さが明らかになった。

ヤコブソンはこうした造格に対して〔周縁〕という意味素性を与え、形態論的見地からの分析に収まりをつけた。しかし実際、造格形式で指示された語は、〔周縁〕という意味素性からは何を指すのか見当もつかず、周囲の語やコンテクストを参照することなしに正確な意味解釈がむずかしい。このため、ヤコブソンは形態論的立場をとりつつも、コンテクストとの照合の必要性に言及しているのである。造格の意味はコンテクストを通して与えられるものであって、格形式を通して与えられるものではないという見解をすでにこの時期に得ていたと考えられる。

この「周縁性」こそが、コードがメッセージにはたらきかける、あるいは相互に作用するという、のちのヤコブソンのコミュニケーション論、および形式、意味、対象という三項関係に基づく言語記号論にとってきわめて重要な契機となったのである。造格の多義性、そして指標性を前に、ヤコブソンは自身のコミュニケーション理論、ひいては言語記号理論において、言語使用の場、「コンテクスト」を考慮に入れずに言語を記述することは不可能であることを認識したのである。言語は、誰がいつどのような状況で話したかという発話事象と、語られる事象世界との関係を指示するものであるというヤコブソンの言語記号論の独自性が明らかになった。